関西自然保護機構会誌 *24*（*2*）：*65－66*，　*2003*

巻　頭　言

今，樹木治療の現場で

三重県科学技術振興センター　佐　野　　明

この秋，学生時代に7年間を過ごした金沢を，久しぶりに訪れた。私が通った当時，金沢大学は金沢城の中にあった。そのことを郷里の友だちに自慢したこともあったように思う。その金沢大学も今は郊外に移転し，城内では「加賀百万石博」というイベントが行われていた。NHKの大河ドラマ「利家とまつ」の影響だろうか，平日だというのに多くの観光客で賑わっていた。

私は正門（石川門）から城内に入ったものの，人の波から逸れて，旧金沢大学植物園へ足を向けた。その昔，といっても20年ほど前まで，ここにはタヌキやムササビが住み，春と秋には多くの渡り鳥が羽を休めにやってきた。園内にいくつかある小さな池ではカルガモやモリアオガエル，ヒキガエルが繁殖し，大木の樹洞にはムササビやフクロウ，アオバズクが住んでいた。三重県の片田舎育ちの私にとって「大都会」である金沢市のど真ん中にこんな場所があろうとは思わず，すぐにお気に入りの場所となった。勉学にちっとも身が入らない私はたびたび研究室を抜け出し，ここで研究とはほど遠い昆虫採集や動物「見物」を楽しんだものだった。

しかし，久しぶりに訪ねた植物園は，あの頃とずいぶん姿を変えていた。園内の小道は舗装こそされていないものの，車がゆうに通れるほどに幅を広げ，よくタマムシを捕まえたカラタチの垣根もきれいさっぱりなくなっていた。そして，ムササビやフクロウを見かけたスダジイの古木の樹洞はウレタンで埋められてしまっていた。今もここに通い続ける大串龍一金沢大学名誉教授のお話では，すでにここではムササビもフクロウも見かけることはないという。

金沢城に隣接する兼六園でも同じような光景を見かけた。ここは手入れの行き届いた庭園の美しさで知られるところだが，スダジイ，ケヤキ，マツ類，カエデ類等の樹洞がことごとく埋められていた。比較的細い枝にできた穴さえも「見逃して」はもらえなかったようだ。充填に使う素材もウレタンだけでなく，モルタルやコンクリートも使われているようで，表面を擬木仕上げにしてずいぶんと手の込んだものもあった。そしてここでも，かつて見られたフクロウや樹洞性のコウモリであるヤマコウモリの姿はなく，ムササビやアオバズクももうほとんど見られないとのことだった。

実はこのようなことは金沢市に限ったことではない。全国各地で，大木の樹洞が埋められ，動物たちがその住みかを追われる事態がおきている。では，いったい誰が，何のために埋めるのだろうか。

近年，巨樹や古木の保全に対する関心が高まり，地域のシンボルとしてこれらを守ろうとする人も多い。そのような人たちの中には，樹幹にぽっかりと開いた穴がどうにも気になる人がいるようだ。つまり，放っておけばそこから腐れが入って（多くの場合，腐れが入ったからこそ樹洞ができたのであるが）木が弱り，しまいには枯れてしまうの

ではないかと心配が募るらしい。また，穴のあいたままでは見栄えが悪いと感じる人もいる。そして，さまざまな「手当て」が施され，場合によっては樹洞が埋められる。つまり，樹洞の閉塞は内部で腐朽が進むのを止めて，樹木を元気にするための治療であり，美観を高めるための美容形成手術という訳である。

しかし，樹木医学（tree health）では樹洞を閉塞することに腐朽を止める効果などないこと，ましてや樹木を元気にすることはなく，時として大きなストレスさえ与えることが指摘されている。これらのことは1970年代の後半にはすでに指摘され，その後，多くの研究者の追試によっても確かめられている。私も「術後の木」を何本も見て回ったが，アフターケアもなく，惨状を呈しているものも多かった。にもかかわらず，今も治療の名のもと，樹洞がどんどん埋められている。それはなぜか。ひとつには樹木医学という学問分野の歴史が比較的浅く，その成果が十分に普及していないこともあろう。樹木に対して手術を行うということが，樹木保全の積極的な取り組みとして多くの場合，マスコミに好意的に取り上げられることにも原因があるかもしれない。樹洞を埋める場合，工事費は時として数百万円を超える。これは受注する側にとっては大きな魅力だろう。そのために，樹洞を埋めることに意義があるか，弊害はないかという最も大切であるはずの問いかけがなおざりにされてきたような気がする。

そもそも樹木が年をとり，幹に空洞ができることが，みっともないことだろうか。樹洞を埋め，擬木仕上げで「化粧」することで，美しくなったと思う人がどれほどいるのだろうか。安くないお金（それは多くの場合，税金である）を払って，樹洞を埋めることを依頼した人は，それが樹木を元気にすることはないことを知っていたのだろうか。樹木の保護管理に関わる人たちに，ぜひ問いかけてみたい。

樹洞性と呼ばれる動物たちは，大木の生い茂る原生林にだけ住んでいるわけではない。山林では大径木がどんどん伐採され，林業の現場でも穴のあいた木は「役立たず」の木として間引かれもする。そのような中で，社寺林や公園などヒトの生活圏内に残された樹木の樹洞が，今ではかけがえのない生活の場になっている例も多い。不必要な治療によって，樹洞性動物たちが住みかを追われることのないよう願っている。